参 考 文 献

安　平鎬(1996)「自動詞文における格の代換について—「発生」と「移動変化」をめぐって、「あふれる」を中心に—」『日本語と日本文学』23, 13-22. 筑波大学国語国文学会.

安　平鎬(1997a)「contents のニ格構文をめぐって」『筑波日本語研究』第二号, 14-27. 筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室

安　平鎬(1997b)「発生構文と語順—日韓対照を中心に—」『筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究報告書』平成 9 年度, 131-140.

安　平鎬(1998a)「韓国語における「移動動詞」をめぐって—「oluta(오르다)」と「ollakata(올라가다)」を中心に—」『文藝言語研究』言語篇 33 号, 95-111. 筑波大学文芸・言語学系

安　平鎬(1998b)「韓国語のいわゆる疑似受動文をめぐって」『筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究報告書』平成 10 年度, 423-441.

安　平鎬(1999a)「現代韓国語の「었(-ess-)」形による「現在の状態」を表す場合の条件をめぐって」『空間表現の文法化に関する総合的研究』平成 7 - 10 年度、文部省科学研究費補助金・基盤研究(A)(2)研究成果報告書(筑波大学), 23-41.

安　平鎬(1999b)「存在場所と結果状態—日韓対照を中心に—」『韓国日本語學會學術發表프로시딩(Proceedings)』8-17. 韓国日本語學會

安　平鎬(2000a)「存在場所と結果状態—日韓対照を中心に—」『東アジア言語文化の総合的研究』筑波大学学内プロジェクト(A)研究報告書, 1-22.

安　平鎬(2000b)「「ある/いる」と「iss-ta(있다)」—日韓対照の観点から—」『筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究報告書』平成 11 年度, 681-698.

安　平鎬(2000c)「「(アル/)イル」と「テイル」をめぐって—日韓対照という観点から—」『国語学会平成 12 年春季大会要旨集』174-181.

安　平鎬(2000d)「結果相を表す表現と空間表現との共起関係—日韓対照を中心に—」『空間表現と文法』215-247. くろしお出版

安　平鎬・福嶋健伸(2000)「中世末期日本語と現代韓国語のアスペクト体系について—存在型アスペクト形式の文法化—」『平成 12 年度日本言語学会秋季大会予稿集』172-177.

安　平鎬・福嶋健伸(2001)「中世末期日本語と現代韓国語のアスペクト体系―アスペクト形式の分布の偏りについて―」『筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究報告書』平成 12 年度, pp. 407-436.
井上優・生越直樹(1997)「過去形の使用に関わる語用論的要因―日本語と朝鮮語の場合―」『日本語科学』1 号, 37-52. 国立国語研究所
井上文子(1998)『日本語方言アスペクトの動態―存在型表現形式に焦点をあてて―』秋山叢書
伊藤英人(1989)「現代朝鮮語動詞の非過去テンス形式の用法について」『朝鮮学報』第 131 輯, (左)1-(左)44.
伊藤英人(1990)「現代朝鮮語動詞の過去テンス形式の用法について(1)―했다形について―」『朝鮮学報』第 137 輯, (左)1-(左)53.
岩崎　卓(2000)「日本語における文法カテゴリーとしてのテンスとは何か」『新・文法用語入門』日本語学臨時増刊号(2000 年 4 月), 28-38.
梅田博之・村崎恭子(1982)「現代朝鮮語」『講座日本語学』11, 40-60. 明治書院
岡　智之(1999)「存在構文に基づくテイル(テアル)構文―認知言語学的アプローチによる文法構文の研究―」『EX ORIENTE』1, 113-131. 大阪外国語大学
岡　智之(2000)「存在型アスペクトとしての朝鮮語고/어 있다 {ko/eo issta} 構文―認知類型論と日朝対照の観点から―」『EX ORIENTE』3, 159-184. 大阪外国語大学
奥田靖雄(1977)「アスペクトの研究をめぐって―金田一的段階―」『宮城教育大学国語国文』8(『日本語研究の方法』松本泰丈編(1978), むぎ書房に所収)
奥田靖雄(1978a)「アスペクトの研究をめぐって」(上)『教育国語』53, 33-44.
奥田靖雄(1978b)「アスペクトの研究をめぐって」(下)『教育国語』54, 14-27.
奥田靖雄(1983)「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」『日本語文法・連語論(資料編)』言語学研究会編, 281-323. むぎ書房
奥田靖雄(1988a)「時間の表現(1)」『教育国語』94, 2-17.
奥田靖雄(1988a)「時間の表現(2)」『教育国語』95, 28-41.
奥田靖雄(1994a)「動詞の終止形(その１)」『教育国語』2-9, 44-53.
奥田靖雄(1994b)「動詞の終止形(その２)」『教育国語』2-12, 27-42.
奥津敬一郎(1996)『拾遺日本文法論』ひつじ書房
生越直樹(1993)「朝鮮語における過去の出来事を表す表現」『日本語とアジア諸言語との対照研究―テンス・アスペクト―』97-121. 1991-1992 年度科学研究費報告書(代表：鈴木重幸)(一般研究(B), 課題番号 03451065)
生越直樹(1995)「朝鮮語했다形、해 있다形(하고 있다形)と日本語シタ形、シテイル形」『国立国語研究所報告 110, 研究報告書 16』185-206.

生越直樹(1997)「朝鮮語と日本語の過去形の使い方について—結果状態形との関係を中心に—」『日本語と朝鮮語』下巻(研究論文編), 139-152. 国立国語研究所
影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
影山太郎(1996)『動詞意味論』くろしお出版
金子　亨(1995)『言語の時間表現』ひつじ書房
菅野裕臣(1986)「朝鮮語のテンスとアスペクト」『学習院大学言語共同研究所紀要』9, 60-70.
菅野裕臣(1990)『動詞アスペクトについて(Ⅰ)』学習院大学東洋文化研究所
菅野裕臣(1992)『動詞アスペクトについて(Ⅱ)』学習院大学東洋文化研究所
北原保雄(1981)『日本語の世界6・日本語の文法』中央公論社
北原保雄(1983)『日本語助動詞の研究』大修館書店
金水　敏(1982)「人を主語とする存在表現—天草版平家物語を中心に—」『国語と国文学』59-12, 58-73.
金水　敏(1983)「上代・中古のキルとヲリ—状態化形式の推移—」『国語学』134, 1-16.
金水　敏(1984)「「いる」「おる」「ある」—存在表現の歴史と方言」『ユリイカ』1984. 11. 臨時増刊号, 284-293.
金水　敏(1987)「時制の表現」『国文学講座・時代と文法—現代語』6, 280-298.
金水　敏(1993)「状態化形式の推移補記」『国語研究』松村明先生喜寿記念会編, 262-277. 明治書院
金水　敏(1994a)「日本語の状態化形式の構造について」『国語学』178集, 101-107.
金水　敏(1994b)「連体修飾の『～タ』について」『日本語の名詞修飾表現』田窪行則編, 29-65. くろしお出版
金水　敏(1995)「いわゆる「進行態」について」『築島裕博士古希記記念・国語学論集』169-197. 汲古書院
金水　敏(1996a)「日本語の存在表現の地理的分布と歴史的解釈」『文化学年報』15, 171-189.
金水　敏(1996b)「日本語のアスペクト形式の類型」『国語学会平成8年度春季大会要旨集』59-66. (於青山学院大学, 1996. 5. 19)
金水　敏(1997)「現在の存在を表す「いた」について—国語史資料と方言から—」『日本語文法・体系と方法』, 245-262. ひつじ書房
金水　敏(1999)「近代語の状態化形式の構造」『近代語研究』第十集, 391-418. 武蔵野書院

金水　敏(2001)「文法化と意味―「～おる(よる)」論のために」『國文学(解釈と教材の研究)』46-2, 15-19. 學燈社
金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』15(『日本語動詞のアスペクト』金田一春彦編(1976), 5-26. むぎ書房に所収)
金田一春彦編(1976)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
工藤真由美(1982)「シテイル形式の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌』13-4, 51-88. 武蔵大学人文学会
工藤真由美(1983)「宇和島方言のアスペクト」『国文学解釈と鑑賞』48-6, 101-119.
工藤真由美(1986)「アスペクトについてのおぼえがき」『国文学解釈と鑑賞』51-1, 39-48.
工藤真由美(1987)「現代日本語のアスペクトについて」『教育国語』91, 2-21.
工藤真由美(1989)「現代日本語のパーフェクトをめぐって」『ことばの科学』3, 53-118. むぎ書房
工藤真由美(1991)「過去の出来事の表現―テンス・アスペクト体系とその機能―」『横浜国大国語研究』9, 47-57.
工藤真由美(1993)「小説の地の文のテンポラリティー」『ことばの科学』6, 19-65.
工藤真由美(1994)「蓮華寺では下宿を重ねた」『国文学解釈と鑑賞』59-7, 60-66.
工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現―』ひつじ書房
工藤真由美(2000)「アスペクト・テンス」『別冊國文学・現代日本語必携』NO. 53, 136-139.
久野　暲(1973)『日本文法研究』大修館書店
河野六郎(1946)「中期朝鮮語の完了時稱に就いて」『東洋語研究』1(『河野六郎著作集Ⅰ』に所収, 467-480. 平凡社)
河野六郎(1951)「中期朝鮮語の時稱體系に就いて」『東洋學報』34(『河野六郎著作集Ⅰ』に所収, 508-534. 平凡社)
杉本　武(1988)「「動詞＋ている」の表すアスペクトについて」『論集ことば』101-115. くろしお出版
鈴木重幸(1979)「現代日本語の動詞のテンス―終止的な述語につかわれた完成相の叙述法断定のばあい―」『言語の研究』5-59. むぎ書房
鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』むぎ書房
鈴木　泰(1986)「テンス」『国文学解釈と鑑賞』51-1, 29-38.
鈴木　泰(1992)『古代日本語動詞のテンス・アスペクト―源氏物語の分析』ひつじ書房
鈴木　泰(1993)「時間表現の変遷」『月刊言語』22-2, 60-67.

宋　美玲(2000)「日韓両言語における時間表現の対照研究—「非過去の事象」に対する時間解釈を中心に—」第 162 回朝鮮語研究会(2000 年 1 月 18 日、於神田外語学院)発表論文
曽我松男(1984)「日本語の談話における時制と相について」『月刊言語』13-4, 120-127.
曽我松男(1993)「日本語動詞における完了と実現について」『アカデミア文学・語学編』第 54 号(217 集), 43-75. 南山大学
高橋太郎・屋久茂子(1984)「「～がある」の用法—(あわせて)「人がある」と「人がいる」の違い—」『国立国語研究所報告 79, 研究報告書』5, 1-42.
高橋太郎(1985)『現代日本語のアスペクトとテンス』秀英出版
竹沢幸一・John Whitman(1998)『格と語順と統語構造』日英語比較選書 9. 研究社出版
坪井美樹(1976)「近世のテイルとテアル」『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』537-560. 表現社
寺村秀夫(1971)「'タ' の意味と機能—アスペクト・テンス・ムードの構文的位置づけ—」『言語学と日本語問題—岩倉具実教授退職記念論文集—』244-289. くろしお出版
寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
中右　実(1980)「テンス、アスペクトの比較」『日英語比較講座・第 2 巻・文法』101-155. 大修館書店
中右　実(1990)「存在の認知文法」『文法と意味の間(国広哲弥教授還暦退官記念論文集)』161-179. くろしお出版
中右　実(1994)『認知意味論の原理』大修館書店
中右　実(1995)「「で」の階層的多義—日英語の空間認知の型(3)—」『英語青年』1995-3 月号, 22-24.
中右　実(1998)「空間と存在の構図」『日英語比較選書 5　構文と事象構造』1-106. 研究社出版
仁田義雄(1982)「動詞の意味と構文—テンス・アスペクトをめぐって—」『日本語学』1-11(創刊号), 33-42.
仁田義雄(1983)「動詞とアスペクト—語彙論的統語論の観点から—」『計量国語学』14-3, 113-128.
日本学術振興会(1997)『文部省学術用語集・言語学編』
丹羽哲也(1996)「ル形とタ形のアスペクトとテンス—独立文と連体節—」『人文研究(国語・国文学)』48-10, 23-60. 大阪市立大学文学部紀要
野村剛史(1994)「上代語のリ・タリについて」『國語國文』63-1, 28-51.

野村雅昭(1969)「近代語における既然態の表現について」『佐伯梅友博士古希記念・国語学論集』表現社(土屋信一編(1983)『論集日本語研究 15・現代語』152-164. 有精堂に所収)
浜之上幸(1991)「現代朝鮮語動詞のアスペクト的クラス」『朝鮮学報』第 138 輯. 左 1-左 93.
浜之上幸(1992)「現代朝鮮語の「結果相」=状態パーフェクト—動作パーフェクトとの対比を中心に—」『朝鮮学報』第 142 輯, 左 41-左 108.
浜之上幸(1997)「朝鮮語のアスペクト—日本語との対比の観点から—」『先端的言語理論の構築とその多角的な論証(1-B)—ヒトの言語を組み立て演算する能力を語彙の意味構造から探る—』平成八年度 COE 形成基礎研究費・研究成果報告(1)・(課題番号 08CE1001), 359-380.
福沢将樹(1997)「タリ・リと動詞のアスペクチュアリティー」『國語学』第 191 号, (左)28-(左)41. 国語学会
福沢将樹(1998)「過去と完了—語り手と視点—」『國語國文研究』第 109 号, 18-33. 北海道大学国語国文学会
福嶋健伸(1998)「中世日本語のテンス・アスペクト—狂言台本虎明本のシタを中心に—」未公開論文(平成十年度修士論文、筑波大学大学院、文芸・言語研究科)
福嶋健伸(1999)「中世末期日本語のシタについて—終止法で継続相現在を表す場合を中心に—」『国語学会平成 11 年度春季大会要旨集』52-59.
福嶋健伸(2000a)「中世末期日本語の基本形について—終止法で現在の状態を表している場合を中心に—」『国語学会平成 12 年度春季大会要旨集』102-109.
福嶋健伸(2000b)「中世末期日本語の～テイル・～テアルについて—動作継続を表している場合を中心に—」『筑波日本語研究』第五号, 121-134. 筑波大学大学院文芸・言語研究科日本語学研究室
藤井　正(1966)「『動詞』+ているの意味」『国語研究室』(東京大学)(『日本語動詞のアスペクト』金田一春彦編(1976), 97-116. むぎ書房に所収)
益岡隆志(1987)『命題の文法—日本語文法序説—』くろしお出版
益岡隆志(1992)「日本語の補助動詞構文—構文の意味の研究に向けて—」『文化言語学—その提言と建設—』546-532. 三省堂
益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版
松本泰丈(1978)『日本語研究の方法』むぎ書房
三上　章(1953)『現代語法序説』刀江書院(1972 年、くろしお出版により、復刊される)
森山卓郎(1988)『日本語動詞述語文の研究』明治書院

矢澤真人(1983)「情態修飾成分の整理—被修飾成分との呼応及び出現位置からの考察—」『日本語と日本文学』第三号, 30-39. 筑波大学国語国文学会
矢澤真人(1985)「情態修飾成分と<シテイル>の意味」『日本語学』4-2, 63-80.
矢澤真人(1992)「格の階層と修飾の階層」『文藝言語研究・言語篇』21, 53-70. 筑波大学文芸・言語学系
矢澤真人(1993)「副詞句と名詞句との意味連関をめぐって」『国文学解釈と鑑賞』平成5年1月号, 135-144.
矢澤真人(1994)「『格』と階層」『森野宗明教授退官記念論文集 言語・文学・国語教育』101-118. 三省堂
山下和弘(1988)「「テ+イル」と「テ+アル」」『語文研究』第六十五号, 17-24. 九州大学国語国文学会
山下和弘(1989)「「タリ」と「テアリ」」『語文研究』第六十六・六十七号, 111-117. 九州大学国語国文学会
山下和弘(1996)「中世以後のテイルとテアル」『國語國文』65-7, 39-54.
柳田征司(1990)「近代語の進行態・既然態表現」『近代語研究』第八集, 1-27. 武蔵野書院
湯澤幸吉郎(1929)『室町時代の言語研究』大岡山書店(再版『室町時代言語の研究』1958. 風間書房)
油谷幸利(1978)「現代韓国語의 動詞分類— aspect 를 中心으로—」『朝鮮学報』第87輯, 左1-左35.
吉川武時(1973)「現代日本語動詞のアスペクトの研究」『Linguistic Communications』9, (Monash University)(『日本語動詞アスペクト』金田一春彦編(1976), 155-327. むぎ書房に所収)
李 美淑(1996)「スルとシテイル—韓国語と日本語の動詞のアスペクト—」『国文学解釈と鑑賞』72-77.
若生正和(2000)「完了した動作を表す韓国語 hako iss-ta 形」『日本言語学会第121回大会予稿集』2000年11月25日(於名古屋学院大学), 184-189.
鷲尾龍一・三原健一(1997)『ヴォイスとアスペクト』日英語比較選書7. 研究社出版

*　　*

고 석주(1996)「'있다' 구문에 대한 연구」『국어문법의 탐구』3巻, 99-127. 南基心編、太學社(Ko, Sek-Cwu(1996)「'iss-ta' 構文に対する研究」『国語文法の探究』3巻, 99-127. 南基心編、太學社)

高 永根(1980)「국어 進行相형태의 處所論的 해석」『語学研究』16-1.(高 永根(1983)『国語의 統辞・意味論』152-170. に所収)(Ko, Yeng-Kun(1980)「国語における進行相形態に関する處所論的解釈」『語学研究』16-1.(Ko, Yeng-Kun(1983)『国語の統辞・意味論』152-170. に所収))

高 永根(1981)『中世国語의 時相과 叙法』塔出版社(Ko, Yeng-Kun(1981))

고 영근(1985)『표준 국어문법론』塔出版社(Ko, Yeng-Kun(1985)『標準国語文法論』塔出版社)

高 永根(1990)「時制」『국어연구 어디까지 왔나』369-378. 동아출판사(Ko, Yeng-Kun(1990)「時制」『国語研究どこまで来ているか』369-378. 東亜出版社)

김 기혁(1998)「존재와 시간의 국어 범주화」『한글』240・241, 205-237.(Kim, Ki-Hyek(1998)「存在と時間の国語範疇化」『hankul』240・241, 205-237.)

김 민수 편(1993)『현대의 국어연구사』서광학술자료사(Kim, Min-Swu 編(1993)『現代の国語研究史』Se-Kwang 学術資料社)

金 錫得(1974)「한국어의 시상」『한불연구』1, 97-145.(Kim, Sek-Tuk(1974)「韓国語の時相」『hanpwulyenkwu』1, 97-145.)

金 錫得(1981)「우리말의 시상」『애산학보』1, 25-70.(Kim, Sek-Tuk(1981)「我が国語の時相」『Ay-San 学報』1, 25-70.)

金 錫得(1987)「'완료' 와 '정태지속' 에 대한 역사적 정보」『한글』196, 155-173.(Kim, Sek-Tuk(1987)「'完了' と '静態持続' に関する歴史的情報」『hankul』196, 155-173.)

김 성화(1992)『국어의 상 연구』한신문화사(Kim, Seng-Hwa(1992)「国語の相に関する研究」Han-Sin 文化社)

金 完鎭(1964)「中世国語 二重母音의 音韻論的 解釈에 対하여」『学術院論文集』4, 49-66.(Kim, Wan-Cin(1964)「中世国語における二重母音の音韻論的解釈について」『学術院論文集』4, 49-66.)

Kim, Young-Joo. 1990. The Syntax and Semantics of Korean Case: The Interaction Between Lexical and Syntactic Levels of Representation, Doctorial Dissertation, Harvard University.

金 英培(1972)『釋譜詳節第二十三・四注解』一潮閣

김 종도(1990)「미완료화 표지 "-는-" 에 대하여」『한글』209 号, 123-140.(Kim, Cong-To(1990)「未完了表示 "-nun-" について」『hankul』209, 123-140.)

김 차균(1980a)「국어 시제 형태소의 의미」『한글』169, 45-116.(Kim, Cha-Kyun(1980a)「国語における時制形態素の意味」『hankul』169, 45-116.)

김 차균(1980b)「「아 있」과「고 있」의 의미」『언어학 창간호』1-54. 충남대 어학연구소(Kim, Cha-Kyun(1980b)「「a iss」と「ko iss」の意味」『言語学創刊号』1-54. 忠南大学校語学研究所)

김 차균(1982)「「있다」의 의미연구」『언어학』5, 55-82. 韓国言語学会(김 차균(1990)『우리말 시제와 상의 연구』155-182, 太學社에 所収)(Kim, Cha-Kyun(1982)「「iss-ta」の意味研究」『言語学』5, 55-82. 韓国言語学会(Kim, Cha-Kyun. 1990.『わが国語の時制と相の研究』155-182, 太學社に所収))

김 차균(1985)「{았}과{었}의 의미와 상」『한글』188号, 3-63. (Kim, Cha-Kyun(1985)「{ass}と{ess}の意味と相」『hankul』188号, 3-63.)

南 基心(1972)「現代国語의 時制에 関한 問題」『국어 국문학』55-57, 213-238. (Nam, Ki-Sim(1972)「現代国語の時制に関する問題」『国語国文学』55-57, 213-238.)

남 기심(1993)『국어 조사의 용법—에와 로를 중심으로—』서광学術資料社(Nam, Ki-Sim. 1993.『国語助詞の用法—'ey'と'lo'を中心に—』sekwang学術資料社)

박 양규(1972)「国語 処格에 対한 研究」『国語研究』27, 1-66. (Pak, Yang-Kyu(1972)「国語の処格に対する研究」『国語研究』27, 1-66.)

朴 良圭(1990)「被動法」『국어연구 어디까지 왔나』493-497. 東亜出版社(Pak, Yang-Kyu(1990)「被動法」『国語研究どこまで来ているか』493-497. 東亜出版社)

박 진호(1994)「중세국어의 피동적 '-어 잇-' 구문」『주시경학보』13, 162-167. (Pak, Cin-Ho(1994)「中世国語の被動的な'-e is-'構文」『周時経学報』13, 162-167.)

배 희임(1988)『国語被動研究』高麗大学校民族文化研究所(Pay, Huy-Im(1988))

서 정수(1976)「국어 시상형태의 의미 분석 연구—ϕ, 고 있, 었, 었었—」『문법연구』3, 83-158. (Se, Ceng-Swu(1976)「国語における時相形態の意味分析研究—ϕ, ko iss, ess, ess-ess—」『文法研究』3, 83-158.)

서 정수(1991)「풀이말 '있/계시다'에 관하여」『국어의 이해와 인식』25-37. 韓国文化社(Se, Ceng-Swu(1991)「phwulimal 'iss/kyeysi-ta'について」『国語の理解と認識』25-37. 韓国文化社)

서 정수(1996a)『수정증보판 국어문법』漢陽大学校出版院(Se, Ceng-Swu(1996a)『修正増補版国語文法』漢陽大学校出版院)

서 정수(1996b)『현대국어문법론』漢陽大学校出版院(Se, Ceng-Swu(1996b)『現代国語文法論』漢陽大学校出版院)

成 耆徹(1974)「経験의 形態 |-었-| 에 대하여」『문법연구』1, 237-269. (Seng, Ki-Chel(1974)「経験の形態 |-ess-| について」『文法研究』1, 237-269.)

宋 美玲(1999)「일본어와 한국어의「過去 事象」에 관한 시간표현의 대조 —화자의 시간해석을 중심으로—」『日語日文学研究』語学・教育篇 第 34 輯, 223-252.(Song, Mi-Lyeng(1999)「日本語と韓国語における「過去事象」に関する時間表現の対照—話者の時間解釈を中心に—」『日語日文学研究』語学・教育篇 第 34 輯, 223-252.)

신 선경(1998)『「있다」의 어휘의미와 통사구조 연구』서울대학교대학원(国語国文学科国語学専攻)博士学位論文)(Sin, Sen-Kyeng(1998)『「iss-ta」の語彙意味と統辞構造研究』Seoul 大学校大学院(国語国文学科国語学専攻)博士学位論文)

안 동환(1981)「우리말 관형절에서의 "-었-" 과 "-ϕ-" 의 시제 표시 기능」『한글』171, 3-28. (An, Tong-Hwan(1981)「我が国語の関係節における-ess-と-ϕ-の時制表示機能」『hankul』171, 3-28.)

양 경모(1993)「일본어와 한국어의 相에 관한 대조 연구」서울대학교 대학원 언어학과 언어학전공 문학박사학위논문(Yang, Kyeng-Mo. 1993. 「日本語と韓国語の相に関する対照研究」Seoul 大学校大学院・言語学科・言語学専攻文学博士論文)

양 정석(1995)『국어동사의 의미 분석과 연결이론』図書出版박이정(Yang, Ceng-Sek(1995)『国語動詞の意味分析と連結理論』図書出版 pakiceng)

옥 태권(1995)「상의 실현과 그 범주」『우리말 연구』5, 99-124. (Ok, Thay-Kwen(1995)「相の実現とその範疇」『wulimal 研究』5, 99-124.)

우 인혜(1988)「개화기 국어의 시제와 상 및 서법에 관하여」『韓国学論集』13, 213-252. (Wu, In-Hyey(1988)「開化期における国語の時制と相及び叙法について」『韓国学論集』13, 213-252.)

우 인혜(1997)『우리말 피동 연구』한국문화사(Wu, In-Hyey(1997)「我が国語における被動研究」韓国文化社)

유 현경(1998)『국어 형용사 연구』韓国文化社(Yu, Hyen-Kyeng(1998)『国語形容詞研究』韓国文化社)

이 기갑(1981)「15 세기 국어의 상태 지속상과 그 변천」『한글』173, 174 어우름, 401-421. 한글학회(I, Ki-Kap(1981)「15 世紀における国語の状態持続相とその変遷」『hankul』173, 174-hoewulum, 401-421. hankul 学会)

李 基東(1976)「韓国語 被動形 分析의 検討」『人文科學論叢』9, 25-41. 建國大(I, Ki-Tong(1976))

李 基文(1961)『國語史概説』塔出版社(『新訂版国語史概説』1998. 太学社)(I, Ki-Mwun(1961))
李 基文(1972)『国語音韻史研究』塔出版社(I, Ki-Mwun(1972))
李 基用(1976)「時間論:'지금' 의 意味」『語学研究』12-2, 161-174. 서울大学校 語学研究所(I, Ki-Yong(1976)「時間論:'cikum' の意味」『語学研究』Seoul 大学校 語学研究所 12-2, 161-174.)
李 南淳(1981)「現代国語의 時制와 相에 대한 研究」『国語研究』46. (「現代国語の時制と相に関する研究」『国語研究』)(I, Nam-Swun(1981))
李 南淳(1983)「様式의 '에' 와 素材의 '에서'」『冠嶽語文研究』第 8 輯, 321-355. 서울大学校(I, Nam-Swun(1983)「様式の 'ey' と 素材の 'eyse'」『冠嶽語文研究』第 8 輯, 321-355. Seoul 大学校)
李 南淳(1987)「'에', '에서' 와 '-어 있다', '-고 있다'」『國語學』16, 567-595. 國語學會(I, Nam-Swun(1987)「'ey', 'eyse' と '-e iss-ta', '-ko iss-ta'」『國語學』16, 567-595. 國語學會)
李 南淳(1990)「相」『국어연구 어디까지 왔나』379-387. 동아출판사(I, Nam-Swun(1990)「相」『国語研究どこまで来ているか』379-387. 東亜出版社)
이 병규(1996)「문장 구성 성분의 항가 의존성 검토」『국어 문법의 탐구』3, 173-215. 太學社(I, Pyeng-Kyu(1996)「文章構成成分の項価依存性検討」『国語文法の探求』3, 173-215. 太學社)
李 崇寧(1954)「十五世紀 母音体系와 二重母音의 Kontraktion 적 発達에 対하여」『東方学志』1, 331-432. (I, Swung-Nyeng(1954)「十五世紀における母音体系と二重母音の Kontraktion 的発達について」『東方学志』1, 331-432.)
이 성하(1998)『문법화의 이해』한국문화사(I, Seng-Ha(1998)『文法化の理解』韓国文化社)
李 承旭(1973)『国語文法體系의 史的研究』一潮閣(I, Sung-Wuk(1973))
李 勇(1992)「18 세기 국어의 時相에 関한 고찰— '—엇—', '—어 잇—', '—어시—' 를 중심으로—」『국어교육』79・80, 91-122. 한국 국어교육연구회(I, Yong(1992)「18 世紀の国語時相に関する考察— '-es-', '-e is-', '-esi-' を中心に—」『国語教育』91-122. 韓国国語教育研究会)
李翊燮・任洪彬(1983)『国語文法論』學研社(I, Ik-Sep・Im, Hong-Pin(1983))
李 智涼(1982)「現代国語 時制形態에 関한 研究」『国語研究』51. (I, Ci-Yang(1982)「現代国語の時制形態に関する研究」『国語研究』51.)
Lee, Hyo-Sang. 1993. Tense or aspect : The speaker's communicative goals and concerns as determinant, with reference to the Anterior -ðss- in Korean. Journal of Pragmatics. 20, 327-358.

李 熙昇(1955)『国語学概説』民衆書館(I, Huy-Sung(1955))
李 熙昇(1956)「存在詞 '있다' 에 대하여」—그 形態要素로의 発展에 対한 考察—『서울대 人文社会科学論文集』3, 17-50.(I, Huy-Sung(1956)「存在詞 'iss-ta' について」—その形態要素への発展に対する考察—『Seoul 大人文社会科学論文集』3, 17-50.)
任 七星(1990)「미래 부정의 '다—{았}—' 연구」『국어국문학』103, 277-292. (Im, Chil-Seng(1990)「未来否定の 'ta — {ass} —' に関する研究」『国語国文学』103, 277-292.)
任 洪彬(1976)「부정법 {—어} 와 상태 진술의 {—고}」『국민대학교 논문집 제 8 집』(Im, Hong-Pin(1998)『국어 문법의 심층 1(国語文法の深層 1)』太學社, 593-621. に所収)(任 洪彬(1976)「不定法 {— e} と状態陳述の {— ko}」『国民大学校論文集第 8 輯』)
任 洪彬(1977)「被動性과 被動構文」『國民大學論文集』12、(Im, Hong-Pin(1998)『국어문법의 심층 3(国語文法の深層 3)』太學社, 333-363. に所収)
任 洪彬(1978)「國語 被動化의 意味」『震壇學報』45、(Im, Hong-Pin(1998)『국어문법의 심층3(国語文法の深層 3)』太學社, 307-332. に所収)
정 문수(1984)「相的 特性에 따른 韓国語 풀이씨의 分類」『문법연구』5, 51-85. 塔出版社(Ceng, Mwun-Swu(1984)「相的特性による韓国語の phwulissi(動詞)分類」『文法研究』5, 51-85. 塔出版社)
장 석진(1973)「시상의 양상 :「계속」「완료」의 생성적 고찰」『어학연구』9-2, 58-72. (Cang, Sek-Cin(1973)「時相の様相 :「継続」「完了」の生成的考察」『語学研究』9-2, 58-72.)
정 유진(1998)「근대국어의 시제」『근대국어의 문법의 이해』홍종선 엮음, 365-388. 도서출판 박이정(Ceng, Yu-Cin. 1998. 「近代国語の時制」『近代国語文法の理解』Hong, Cong-Sen 編, 365-388. 図書出版 Pakiceng)
정 태구(1994)「'-어 있다' 의 意味와 論項構造」『國語學』24, 203-230. 國語學會(Ceng, Tay-Kwu(1994)「'-e iss-ta' の 意味と論項構造」『國語學』24, 203-230. 國語學會)
최 기용(1998)「'있-' 의 범주, 논항구조 그리고 능격성」『國語學』32, 107-134. 國語學會(Choy, Ki-Yong(1998)「'iss-' の範疇と格構造、それから能格性」『國語學』32, 107-134. 國語學會)
崔 東柱(1995)「国語 時相体系의 通時的 変化에 관한 研究」서울대학교대학원 박사학위논문(Choy, Tong-Cwu(1995)「国語における時相体系の通時的変化に関する研究」Seoul 大学校大学院博士学位論文)

최 호철(1993)「현대국어 서술어의 의미연구」高麗大学校博士学位論文(Choy, Ho-Chel(1993)「現代国語における叙述語の意味研究」高麗大学校博士学位論文)

韓 東完(1986)「過去 時制 '었' 의 通時論的 考察」『國語學』15, 217-248. 國語學會(Han, Tong-Wan(1986)「過去 時制 'ess' の 通時論的 考察」『國語學』15, 217-248. 國語學會)

韓 東完(1996)『国語의 時制 研究』国語學叢書 24. 國語學会(Han, Tong-Wan(1996)『国語の時制研究』国語學叢書 24. 國語學会)

韓 在永(1986)「中世国語 時制体系에 対한 管見：先語末語尾 |더| 의 位置定立을 中心으로」『언어』11-2, 258-284. (Han, Cay-Yeng(1986)「中世国語の時制体系に対する管見：先語末語尾 |te| の位置定立を中心に」『言語』11-2, 258-284.)

許　雄(1952)「'에, 애, 외, 의' 의 音價」『國語國文學』1, 5-8. (He, Wung(1952)「'ey, ay, oy, 의' の音価」『國語國文學』1, 5-8.)

許　雄(1977)「15 세기에서 16 세기에 이르는 국어 때매김법의 변천」『世林韓国学論叢』第一輯, 413-483. 世林奨学会(He, Wung(1977)「15 世紀から 16 世紀までの国語における「ttaymaykim(時相)」法の変遷」『世林韓国学論叢』第一輯, 413-483. 世林奨学会)

許　雄(1987)『우리말 때매김법의 변천사』샘문화사(He, Wung(1987)『我が国語における時相法の変遷史』saym 文化社)

홍 재성 외 9인(1997)『현대 한국어 동사 구문 사전』두산동아(Hong, Cay-Seng(1997)『現代韓国語動詞構文辞典』斗山東亜)

*　　*

Bresnan, Joan. 1994. Locative inversion and the architecture of universal grammar. Language 70. 72-131.

Burzio, Luigi. 1986. Italian Syntax. Dordrecht: Reidel.

Bybee, Joan, Revere Perkins and William Pagliuca. 1994. The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in The Languages of the World. The University of Chicago Press.

Chafe, Wallace. 1970. Meaning and the Structure of Language, 青木晴夫訳(1974)『意味と意味構造』大修館書店

Comrie, Bernard. 1976. Aspect. Cambridge University Press, (山田小枝(1988)訳『アスペクト』むぎ書房)

Comrie, Bernard. 1985. Tense. Cambridge University Press.

Dahl, Östen. 1985. Tense and Aspect Systems. Oxford: Basil Blackwell.

Dowty, David R.1979. Word Meaning and Montague Grammar, D. Reidel Publishing Company

Foley, W. A. and R. D. Van Valin, Jr. 1985. Information packaging in the clause. Language typology and syntactic description Vol. I Clause structure, 282-364. Ed. Timothy Shopen. Cambridge University Press.

Heine, Bernd, Ulrike, Claudi and Friederike Hünnemeyer. 1991. Grammaticalization: A Conceptual Framework. The University of Chicago Press.

Hopper, P. J. 1979. Aspect and Foregrounding in Discourse. In T. Givon. (eds), Syntax and Semantics, Volume 12: Discourse and Syntax. New York: Academic Press.

Hopper, P. J. 1982. Aspect between Discourse and Grammar: An Introductory Essay for the Volume. In P. J. Hopper. (eds), 1982. 3-18.

Hopper, P. J. (eds), 1982. Tense-Aspect: Between Semantics and Pragmatics. Amsterdam: John Benjamins.

Hopper, P. J. 1991. On Some Principles of Grammaticization. Approaches To Grammaticalization. Volume I, Traugott E. C. and B. Heine. (eds), 17-35. John Benjamins Publishing Company.

Hopper, P. J. & E. C. Traugott. 1993. Grammaticalization. Cambridge University Press.

Jone, Lyons. 1977. Semantics. Volume 1, 2. Cambridge University Press.

Keenan, E. L. 1975. Some universals of passive in relational grammar. CLS 11, 340-352.

Levin, Beth. 1993. English Verb Classes and Alternations. University of Chicago Press.

Levin, B. and M. Rappaport. 1995. The Problem of Locative Inversion. Unaccusativity: At the syntax-Lexical Semantics Interface, Linguistic Inquiry Monograph Twenty-Six., 215-277. The MIT Press.

Martin, Samuel. E. et al. 1967. A Korean-English Dictionary. New Haven:Yale University Press.

Maslov, J. S. 1988. Resultative, Perfect and Aspect. In V. P. Nedjalkov, (eds), 1988, 63-85.

Nedjalkov, V. P. (eds), 1988. Typology of Resultative Constructions. Amsterdam: John Benjamins.

Perlmutter, David. 1978. Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis. BLS 4. 157-189.

Permutter, D. M. and P. M. Postal. 1977. Toward a universal characterization of passivization. BLS 3, 394-417.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. A Comprehensive Grammar of English Language. Longman, London.

R. Declerck. 1991. A Comprehensive Descriptive Grammar of English. Kaitakusha.

Reichenbach, H. 1947. Elements of Symbolic Logics. The Free Press, New York. (石本新訳(1982)『記号論理学の原理』大修館書店)

Smith, C. S. 1991. The Parameter of Aspect. Kluwer Academic Publishers.

Vendler, Z. 1967. Linguistics in Philosophy. Cornell University Press.